

エルサルバドルでの濃厚な2年間

夫に同伴した海外駐在は、断続的ですがトータル9年半になります。その中でも、エルサルバドルの2年間ほど、忙しくて、濃厚で、充実していた期間は他になかったのではないのでしょうか。

当時、中学1年生と2年生になろうとしていた娘二人を連れて、家族4人と犬1匹でエルサルバドルに渡航しました。娘二人は日本で中学生を送ることができない不満と、未知の環境への不安で一杯だったと思います。でも夫と私の間では、単身赴任の選択肢は全くありませんでした。

子供たちにとって開発途上国と言われる国での経験は、何ものにも代えがたいものになると信じていたからです。家族の一員である犬も連れていくことに迷いはなかったのですが、正直とても大変でした。(犬にとっては迷惑だったかもしれません)

でもこの仔が、子供たちはもちろん、家族みんなの気持ちをどれほど和ませてくれたことか。

こうしてみんなで渡航したことで、それぞれの現地との関りから、結果、実に濃厚な滞在期間になったのだと思います。



【妻としての役割】

主人は組織の長として、やはり忙しい生活でした。家へのお客様が多く、いわゆるホームパーティーを随分やりました。その準備は3日前から始まります。数日前にはスーパーにあった食材が、今日はどこに行ってもないということも多々あり、何件もスーパーのはしごをしなければなりませんでした。

あまりお料理が得意ではない私にとっては、10種以上のメニューを準備するのは、実に大変なことでした。メニューも毎回同じものを作るわけにもいかず、初めて作ったお料理をお出しすることもしばしばで、一発勝負のチャレンジングな経験でした。笑

【親としての役割】

娘二人の学校に関しては、何をおいても一番に優先しなければなりません。

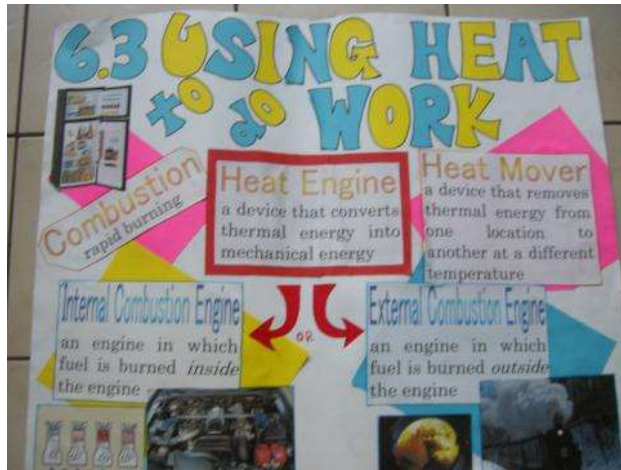
制服をそろえて、学用品をそろえるだけでも大変。そこは習慣の違いから分からないことだらけの始まりでした。指定の文房具がどこで売っているかもわからないし、テキスト1冊分コピーして製本しなければならなかったり。それってどこでやるの?の状態でした。

そして何といても一番大変だったのが、毎日の宿題でした。

中でも長文読解は、5~6ページの文章を読んで設問に答えなければなりません。ネイティブのお子さんなら30分でできるのが、娘たちの場合は辞書を引きながら1ページ読むだけでも30分かかり、それから問題を解いていくという気が遠くなる作業でした。

英語が得意とは言えない私は、二人分の宿題の手伝いはできるはずもなく、夜10時~11時に帰ってくる夫を頼りにせざるを得ませんでした。

長女は負けず嫌いで、胃痛を起こしながらも頑張っていました。次女は小学校を卒業したばかりの年齢で、よく眠たいと言って泣いていたものです。



宿題で冷蔵庫の構造を発表

しかし、こういう状態が2年間続いたのかということとそんなことはなく、半年もすると自分たちだけで宿題ができるようになっていましたから、子供の成長は目を見張るものがありました。

語学に関しては、帰国のころ（2年後）には友達と自由にコミュニケーションが取れるようになっていました。毎日嫌というほど英語のシャワーを浴び、宿題に追われ、親から見てかわいそうなほど苦勞はしていましたが、そのおかげで今は語学力が彼女たちの最大の強みになっていることは間違いありません。

中学生レベルの英語力ですから、語彙力はあまりないのですが、何といっても聴解力が身についたと思います。

渡航前は日本の教育がおろそかになることを、子供たちは大変心配していました。

高校に戻った時についていけないのではないかと。でも夫と私はそれは心配していませんでした。

高校や大学で日本の教育を受ける機会はいくらでもあると思ったからです。

帰国後、高校受験は二人とも帰国子女枠で入学することができましたし、大学入試や就職試験でも、語学力や海外経験は大いに役に立ったと思います。

【私個人の活動】

以前ドミニカ共和国に滞在した時の反省として、現地の方たちとあまり深く関わるができなかったということがありました。

当時、駐在員の家族の中には、和紙を使ったちぎり絵を教えたり、日本料理を教えたりして、日本文化を現地の人たちに伝えるという素晴らしい活動をされている方がいました。私には何もないなと思っていた時、日本語を教えてくれないかと頼まれたことがありました。当然その時はできなかったのですが、日本語を習いたいという人がいることを知り、帰国後は日本語教育の勉強をし、日本語教師を3年間務めました。

そしてエルサルバドルに赴任の際は、日本語教育の教材を携え、日本語を習いたいというエルサルバドル人にボランティアで教える活動をしました。

週2回、我が家に5人～10人ぐらいの人が来てくれ、教室の後のティータイムでは、みんなとおしゃべりできたのはとても楽しいひと時でした。



【補習校の先生】

子供たちの通う補習校は、日本から教師が派遣される規模ではなかったため、先生も現地調達（笑）でした。現地に住む日本人や父兄がそれを担うしかなく、まさかの私にもその役割が回ってきました。

中学の国語、数学をもう一度勉強しなおして、硬くなった頭を軟化させるいい体験だったと思っています。

【ペット同伴】

ペットを連れて行った以上、動物病院との関りは当然あるわけですが、我が家の場合、実に深い関りになってしまいました。

エルサルバドル滞在時に、左後足を骨折してしまったのです。いつものかかりつけの先生は残念ながらあまりいい先生ではありませんでした。足を固定する手術をして3か月様子を見ましたが、骨が付いていなくてもう一度手術。そしてまた3か月の入院。でも2回目もやはり骨は付かず、病院を変えて3回目の手術を試みました。しかしすでに骨折から半年経っていて、やはり治ることはなく、最終的には足を付け根から切断しました。結局合計4回の手術をしたこととなります。とても可哀想でしたが、3本足になっても13年間元気に走り回って生きてくれました。エルサルバドルでの生活を共にしたかけがえのない家族です。

こうして家族全員で渡航したことにより、エルサルバドルの生活は実に忙しい、でも楽しい、まあいろんなことがギュッと詰まった2年間だったと懐かしく思い出されます。

最後に現在27歳の次女の感想を載せておきます。

「最初の半年ほどは「日本に帰りたい」とよく言っていた気がします。でもだんだん言葉がわかるようになると、あれほど苦労していた宿題も、内容は日本の教育内容よりも簡単で、クラスでもトップの成績を取ることができるようになりました。海外の学校は、日本の学校よりもイベント事を大切にしている、スポーツ大会やハロウィン、バレンタインやクリスマスなど楽しいこともたくさんありました。

エルサルバドルでの2年間があったからこそ、どのような環境にも順応できる力や、様々なバックグラウンドを持った人と抵抗なく関われるコミュニケーション能力などが身についたと思っています。」

高橋 祥子（たかはし しょうこ）氏

2005年～2007年にJICAエルサルバドル事務所に赴任の夫に同行。

中学生の娘2人と犬1匹（ヨーキー、当時2歳）と共にサンサルバドルに2年間滞在した。

現在は、その後駐在したホンジュラスとご縁があり、スペシャルティコーヒーを直輸入し販売するネットショップを経営している。